

歴史的地域素材の教材化とその特色†

—「古里かるた わたしたちの八橋・寺内」を事例として—

外池 智*

秋田大学教育文化学部

「古里かるた わたしたちの八橋・寺内」は、1979-1980（昭和54-55）年の野尻滋校長期（1978-1982）に秋田市立八橋小学校で作成された「郷土かるた」である。野尻氏はその後、同じ秋田市の他地域を題材に5つのかるたを作成している。県単位ではなく市町村単位の同一地区で、計6つの「郷土かるた」が作成された例は他に類をみない。本研究では、主に歴史的視点を中心とした地域素材の教材化について、この「八橋・寺内かるた」を具体的事例としてその作成過程を明らかにするとともに、同じ秋田市の「郷土かるた」である「土崎郷土かるた」、全国的に著名な「上毛かるた」との比較によりその題材における特色を明らかにした。「八橋・寺内かるた」は、いわば学校が生み出した文化である。こうした教材は、その作成者のみならず、作成の舞台となった学校において継承・発展されることによって、地域文化としての意義を有する。それは、これまで個別に開発・「消費」される教材を、他の教員、当該学校として共有化することであり、ひいては地域の文化として継承することである。

キーワード：「古里かるた わたしたちの八橋・寺内」、郷土かるた、地域素材、教材化

1. 本研究の目的

本研究の目的は、主に歴史的地域素材の教材化について、「古里かるた わたしたちの八橋・寺内」を具体的事例としてその作成過程を明らかにするとともに、同じ秋田市の「郷土かるた¹⁾」である「土崎郷土かるた」、全国的に著名な「上毛かるた」との比較によりその題材における特色を明らかにすることである。

昨年度より平成10年度版学習指導要領が小・中学校で全面実施されている。小学校では、従来3・4年生を中心に展開されてきた地域学習を再編し、さらに「調べたことを表現する」ことを重視している。また、中学校では地理的分野で身近な地域、都道府県、国の3つの規模に応じた学習が、また歴史的

野では「身近な地域の歴史を調べる学習」が、身近な地域をフィールドとした「学び方を学ぶ学習」として重視されている。身近な地域をフィールドとした学習は、戦前の郷土教育から盛んに提唱され、戦後は地域学習として様々な実践が展開されてきたが、平成10年度版学習指導要領においては、「学び方を学ぶ学習」の展開の場として身近な地域は重視されているのである。さて本研究では、こうした身近な地域をフィールドとした学習のうち、特に歴史的な地域素材の教材化とその特色について、「古里かるた わたしたちの八橋・寺内」（以下「八橋・寺内かるた」と略す）を具体的事例に明らかにしたい。

「八橋・寺内かるた」は、1979-80（昭和54-55）年に、秋田市立八橋小学校で作成された。後述するように、作成の中心になったのは当時同校の校長であった野尻滋²⁾氏であるが、野尻氏はその後、同じ秋田市の他地域を題材に5つのかるたを作成している³⁾。県単位ではなく市町村単位の同一地区で、合計6つの「郷土かるた」が作成された例は他に類をみない。本研究では、こうした秋田市内の各地区

2003年1月21日受理

†Development of Teaching Materials as Cultural Heritage

—A Case of a Traditional Japanese Style Card Game Developed in Yabase/Terauchi Area

*Satoru TONOIKE, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

を題材とした「郷土かるた」のうち、最初に作成された「八橋・寺内かるた」を取り上げる。また、かるたは、遊びを取り入れた学習方法として、さらに伝統玩具を活用した学習方法として授業実践に取り入れられてきた。しかし、本研究ではかるた自体の教育的効果より、むしろかるたの題材として地域素材の何を選択したのか、それをどのように教材化したのか、そしてそれにはどのような特色があるのかに注目したい。かるたは読札・取札で構成されるが、その数が限定されているので、当然その題材となる地域素材も限定される。かるたの題材として選択された地域素材は、そうした厳選された結果としての地域素材といえる。結果としてどのような地域素材が選択されたのか、そこにはどのような特色があるのか、そしてそれはどのような過程で作成されたのかに注目し分析を試みたい。

2. 「八橋・寺内かるた」作成の経緯

(1)作成の契機

まず、「八橋・寺内かるた」の作成の契機について取り上げる。「八橋・寺内かるた」は、1980（昭和55）年1月、野尻滋校長（1978-1982）に秋田市立八橋小学校により刊行された。同校は1973（昭和48）年4月2日に開校された学校で、学区は秋田市八橋、寺内の一部、外旭川の一部であった。当時、同地区は新興の住宅地であったため、同校は年々児童が増加し、開校してわずか5年の1978（昭和53）年当時で児童数約1,600人、38学級という「マンモス校」であった。教室不足のため、特別教室も普通教室として充当されていた。しかし、1979（昭和54）年の春に秋田市立泉小学校が新設され、八橋学区だった泉地区の一部の児童が泉小学校に移ることになり、児童数約1,200人、学級数34になった。教室にゆとりができた同校は、図書室や郷土資料室などの特別教室を特設することにした。また、当時「ゆとりと充実」を目指した新学習指導要領（1977年度版）の展開により、授業にも「ゆとりの時間」が設けられるようになった。こうした学校内施設上のゆとり、授業時数上のゆとりといったいわば学校のハード上とソフト上の二重のゆとりにより、同校は郷土学習への積極的取り組みを目指したのである。

さらに、八橋・寺内地区は、当時新興住宅地とはいえ、天平年間より秋田出羽柵としてその痕跡を残す秋田城址や古四王神社、江戸中期に三河より秋田

を訪ね「菅江真澄遊覧記」と総称される多数の著作を残した菅江真澄の墓など豊富な史跡に恵まれた地区であった。加えて、八橋地区はかつて八橋油田として昭和期に全国一の産油量をなし、日本の産油量の80%余りを産出した場所であった。すなわち、八橋小学校の所在である八橋・寺内地区は、秋田のみならず全国的にもその足跡を残す史跡に恵まれ、歴史的観点から郷土学習を展開する場所として恵まれた地区であった。しかし、同地区は当時新興住宅地であったため、そうした学校近隣の豊富な史跡の存在は、児童のみならず新興住民にも知られずにいた。これについて、「八橋・寺内かるた」作成の中心となった野尻氏は以下のように述べている。

「八橋小学校で校長をしていた時に、油田のやぐらが、なぜ建てられてのか、わからない子供が多いのにびっくりしました。かつて、八橋が全国有数の油田地帯であったことを知らなかったのです。当時の八橋は新興住宅地であり、住民のほとんどが、ほかから移り住んだ人たちだったのです。子供たちが、自分たちの住んでいる町について、知らないのも当然です。そこで、郷土の歴史や文化、風俗を遊びながら勉強してもらうために、カルタ作りを思いついたのです⁴。」

1978（昭和53）年に校長として八橋小学校に赴任した野尻氏は、児童や保護者の方のためにと自身で掲載した八橋油田の写真を児童が見て、「先生、これ何？はしご？」と問われたことを現在も鮮明に記憶しているという⁵。秋田市八橋地区では、八橋油田の櫓が同地区の景観の象徴であった。しかし、そこに生きる児童は、もはやその象徴的景観である櫓の存在を知らなかったのである。こうした状況に対し、野尻氏は、身近な史跡とそれを通じた郷土学習への取り組みの必要性を痛感した。すなわち、児童の家庭生活や学校生活を取り囲む豊富な史跡を活かし、豊かな人間形成をねらいとした学習活動の構築を目指したのである。

(2)「学年の広場」の活動

以上のような契機を踏まえ、八橋小学校では野尻校長を中心に郷土学習に取り組んでいった。具体的には、「心豊かな児童を育てる教育を目指す」とし

て1979（昭和54）年から「学年の広場」を特設し、これまで何気なく見過ごしてきた児童の身近にある史跡や神社・寺院など、学区内の史跡巡りを行う一方、郷土資料室を設けて郷土学習を進めたのである。当時秋田県下では「ふるさと学習」への取り組みが盛んに求められるようになっており、「学年の広場」は、そうした「ふるさと学習」への主体的取り組みでもあった。

こうした「学年の広場」の展開に当たり、八橋小学校の教諭たちは「学年の広場研究グループ」を組織し、学習内容の構成や教材研究に取り組んだ。実際の学習活動においては、全学年を通じて各教科、道徳、特別活動の各領域において、関連内容における全ての機会に学校近隣の地域素材を活かすとともに、年間三回、各学年ごとに近隣史跡へのフィールドワークを行い、史跡の歴史的学習や描画、作文などを実施した。すなわち、例えば昭和初期の郷土教育の中で展開された「郷土科」のように、特設の時間を年間の教育課程に設けて実施するのではなく、学習のあらゆる機会を通じて地域素材を取り扱うといった、いわゆる「各科の郷土化」の視点による郷土学習である⁶。

また、教室のゆとりにより特設された郷土学習室も、この「学年の広場」による郷土学習に重要な役割を果たした。野尻滋校長と新山雄彦（社会科）教諭が中心となり、こうした「学年の広場」の活動を活かし、これと連動した郷土学習室の充実を目指したのである。郷土学習室の内容資料の収集に関しては、児童の保護者や八橋油田の資料を有する帝国石油秋田鉱業所にも呼びかけ、石油の歴史や写真資料なども収集された。石油槽の写真も、学校近隣の写真店により複製され掲示された。また、地域に伝えられる八橋人形も、製作者の道川ハナ氏や高松茂子氏により、ひな祭りに合わせてさまざまな人形が寄贈された。さらに、秋田佐竹ライオンズクラブからは、高さ2メートルの杉材による石油槽の手作り模型も寄贈された⁷。また、同校ではこうした郷土学習室の内容充実を目指した収集活動ばかりではなく、積極的に収集された資料を活用した学習も展開された。例えば、図工を主担当とする小松（現在中村）恵子教諭は、古い絵図を題材とした大判の古地図の再現学習⁸、社会科では前述した選定地域への児童とのフィールドワーク、史跡の写真撮影、その由来を調査する学習などを展開した。こうした八橋小学

校の熱意ある取り組みは、やがて住民にも伝わり、PTAからは「父母にも郷土学習の場を提供してほしい」との申し入れがあって、野尻氏が中心となり史跡巡りも実施された⁹。

(3)作成の経緯

そして、こうした「学年の広場」の取り組みと並行して、さらに「遊び」を取り入れて楽しく学習を進めようと「八橋・寺内かるた」の作成が企図されたのである。地域の素材を「かるた」という形で教材化しようという発想は、当時明治図書が中心となって進めていた「郷土かるた」による影響が大きい。明治図書は1979（昭和54）年の頃、学習教材部門において11種（宮城、秋田、岩手、会津、茨城、東京（23区）、静岡（駿河）、西三河、名古屋、尾張、石川）の郷土かるたを製作した。しかし、実際は同社の単独製作ではなく、同社の企画により賛同した各地方の学校教育団体に依頼し作成された¹⁰。秋田県の場合は、県内の小・中学校の社会科の教員で組織された秋田県社会科教育研究会が中心となり、1979（昭和54）年に郷土かるた「わたしたちの秋田」として作成された。八橋小学校の校長である野尻氏は、当時同会の副会長を務めており、この企画に関わっていた。地域素材を「かるた」という形で教材化するという発想は、この企画による影響が大きい。しかし、実際の作成において、「わたしたちの秋田」と「八橋・寺内かるた」それぞれは、ほぼ同時期に同時並行して作成されており、「かるた」という表現手段は影響を受けているにしても、実質的な作成は八橋小学校独自に製作された¹¹。

さて、「八橋・寺内かるた」の作成は、こうした「わたしたちの秋田」作成にヒントを得た野尻氏が提起し、八橋小学校の主体的取り組みにより作成された。作成は1979（昭和54）年の夏休みから開始された。豊富な地域素材の組織化に当たり、まず教員が積極的に地域を学ぶ必要があるとして、当時秋田大学附属小学校教諭で秋田市内の史跡に詳しく、また『秋田魁新報』に「八橋物語」を長期連載¹²した飯塚喜一氏に依頼し、学校近隣のフィールドワークが実施された。また、その際に井上隆明（秋田経法大学）『秋田の今昔』（歴史図書社、1977）が参考文献とされた¹³。こうした教員による史跡探索を通じ、かるたの題材として51ヵ所の近隣史跡が選定された。次にかるた自体の作成資料収集として、さらなるフィー

ルドワークが実施された。各教員が選定された史跡を分担し、史跡の由来に関する情報収集や、取り札の図案となる写真撮影やモデル写生が実施された。「八橋・寺内かるた」は、読札と取札、かるた地図の三点よりなるが、実際のかるた作成に当たり、取札に関しては図工を主担当としていた小松恵子教諭と桜田侑宏教諭が担当し、分担して原画作成と切り絵による配色をした。一方読札に関しては、野尻校長が中心となり作成し、取札の裏には題材の解説も掲載された。こうしてほぼ半年余りの歳月をかけて作成された「八橋・寺内かるた」は、1980（昭和55）年1月に完成した。

「八橋・寺内かるた」は作成中から反響が大きく、保護者からは「一般の住民でさえ郷土の歴史に詳しくないので、ぜひ、一般にも分けて欲しい¹⁴」との強い要望がなされていた。同校のPTAでは、こうした要望に対し特別に注文を受けるなどの対応をしたが、これまで「寺内で育った兄弟や、子供たちに分けてやりたい」と、一家で5部も注文する保護者や、「親類や友達にわが郷土を理解してもらうのに、もっともわかりやすい教材だ」といって申し込む人もおり、完成した1980（昭和55）年1月末日時点で、600部近い注文が殺到した。最終的に、在校生や学校関係者の分も含めて初版は千部程作成された。「子どもたちにもっと自分たちに住んでいる地域を知ってもらいたい。そして自分たちの住んでいるところはこんなに素晴らしいところなんだという気持ちを持ってもらいたい¹⁵。」こうした願いが、「八橋・寺内かるた」を完成させたのである。

(4)かるたを契機とした多様な学習活動の展開

さて、完成されたかるたは当時同校での学校教育でどのように活用されたのであろうか。まず「八橋・寺内かるた」は元来遊具であるので、当然遊びのかるたとして使用された。お正月の時期には全校規模のオーソドックスなかるた大会が実施され、さらに、文化祭では取札を大きくしてビニールでコーティングした特製取札を雪が積もる校庭にばらまき、イベント的なかるた大会も実施された。また文化祭では、かるたで取り上げた題材が劇化され発表された。取り上げられた題材は④の「面影橋」（資料1参照）で、かつて刑場へ向かう囚人が最後に自身の姿を移した場所としてその地名が残る「面影橋」を劇化し発表した。劇は保護者にも公表され、大変好評だっ

たという。また同じ文化祭では、その後も継続的に実施されたフィールドワークの中で収集された石碑の拓本（例えば⑦の「筆塚」、⑩の「蜺塚」「鶏卵塚」など）も展示された。

次に各教科での活用について、まず関連単位における導入や授業の内容教材としてこのかるたは活用された。前述したように、取札には題材となった史跡がビジュアルに描かれていると共にその裏には史跡に関する解説が記されている。図と文書の両方を活用した「各科の郷土化」の視点による学習展開である。特に社会科では、3・4年生の地域学習で、やはり単元の導入やまとめにおいて、「八橋・寺内かるた」に取り上げられている史跡を対象に史跡巡りを実施し、かつてかるた作成時に教員自身がなしたフィールドワークを児童に追体験させる学習を展開している。また、②の「八橋人形」に関しては、前述の通り製作者の道川ハナ氏や高松茂子氏により人形そのものが雛人形などとして郷土資料室に寄贈されたが、体験学習として児童による人形作りも実施された。

このように、八橋小学校では「八橋・寺内かるた」が契機となり、「遊び」を活用した学習、「大かるた」によるイベント的学習、題材の劇化によるロールプレイング、拓本収集による資料展示、「各科の郷土化」、追体験のフィールドワーク、そして人形作りによる体験学習など、多様な実践が展開されたのである。

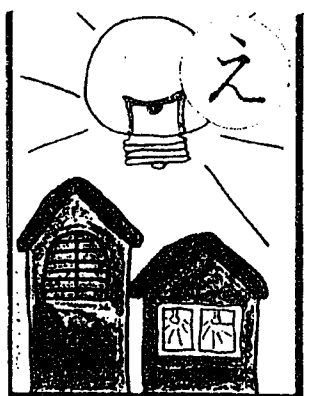
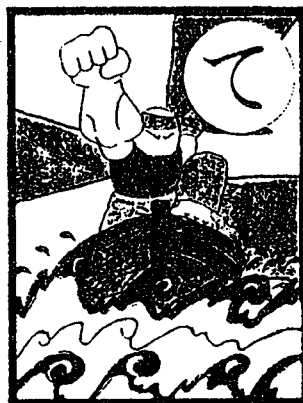
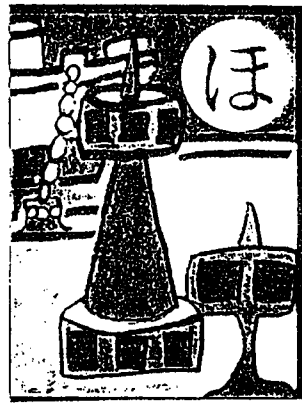
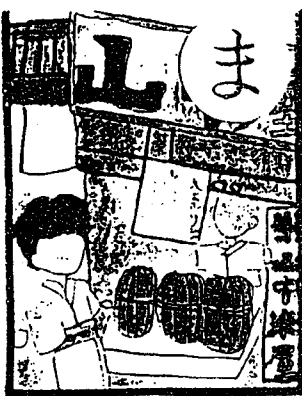
3. 「ふるさとかるた」における題材の分析

(1)「土崎郷土かるた」と「上毛かるた」について

次に、「八橋・寺内かるた」の題材について、同じ秋田市を題材とした「土崎郷土かるた」（以下「土崎かるた」と略す、資料2参照）、全国的に郷土かるたとして有名な「上毛かるた」（資料3参照）との比較により、その特色を明らかにしていきたい。「八橋・寺内かるた」や「土崎かるた」などの学校が作成主体となった「郷土かるた」は、基本的にそれを使用する子ども達への教育的配慮により作成されている。すなわち、教材として如何に地域題材を組織化するかという視点で製作されている。実際の史跡数や学術的な文化財の価値といった視点が優先されて題材が選定されているのではなく、学校が作るかるたとして取り上げるべき題材は何か、教材化するべき題材は何かといった視点で選定されていると

資料2 「土崎郷土かるた」読札一覧

あ あんどんから 町のあかりは 石油ランプへ	い いらかを並べ 中はぎつしり 米の山	う 海の上 安全を守る 金比羅さん	え エンジンの 明るい光が 土崎に	お 鬼の面 昔をしのぶ 湊城
か カプセルを 開けるその時 胸おどる	き 勳勉に はげめと贈る 金次郎像	く 空襲を 忘れてならじと 乙女像	け 見物人 はしからはしまで ピクのぞき	こ 工機部の 人でにぎわう 港町
け 財産を 町に生かした 近江谷栄次	し 神明の 加護で栄える 港町	せ 着札之助 エネルギーに 貢献し	せ 先代に 引き継ぎ続けた 港町	そ 祖父も歌う 校歌の作者 金子洋文
た 七夕の夜空に響く 今日もサンチョ 明日もサンチョ	ち ちんちん電車 港と秋田の 橋渡し	つ 土崎の 港開いた 安東氏	て 伝統の 精神生きている 港魂	と 遠くに響く 笛太鼓 心も踊る港っ子
な なをあげた 土崎生まれの 学者たち	に 日本の 発展支えた 秋田の石油	ぬ ぬくもりを 家庭に与えた 天然ガス	ね 願ひ込め 「種まく人」が 世に知られ	の のっしのっしと港の力 土俵にぶつける 出羽渡
は 初めての蒸気船 浜は黒山の 見物人	ひ 人を呼ぶ 老舗が思づく 商店街	ふ 文明開化 この土崎に 花開く	ひ 平和に尽くした 外交官 須藤弥吉郎	ほ ほくたちの 未来に夢を ポートルネ
ま 町なみに 郷土のかおり おらが道	み 濃意気 廻船問屋が開く 新航路	む 昔も今もかわらない 三角屋根の 駅すがた	め 明治七年 生まれし土 我が母校	も 戻り山車 あいや節から もりあがり
や 山拓き 杉を育てて 山林王	り 理想をいだき 国の政治に 身をつくす	や 誓とけて さばくちと共に 春がくる	れ 運台に 鎮座します 弁天さん	よ 世は変われども 昔のままの 三木橋
わ 忘れのみなと 発展のみなもと 秋田港	る るるの続き 活躍めざまし 文化人	ろ 六隻の 汽船で栄える 港町	ま 「しま」 にぎわった	



③ 町なみに 郷土のかおり おらが道
江戸時代前から土崎の町は安東氏の城
下町として栄え、町も「湊八丁」と呼ば
れにぎわいを見せた。新城市、上酒田町、
下酒田町、永寛町、加賀町、小鶴町、會
町、萩町を中心に店や問屋が並んで、人
々が往き来し、特に港へ船が着くと「湊
八丁」は、にぎわった。

ポートルネッサンス21
④ ほくたちの 未来に夢をポートルネ
秋田港が二十一世紀の新しい港に生ま
れ変わる「ポートルネッサンス21」の事
業が、平成元年から平成十二年の完成を
目指している。高さ百メートルのポートル
タワーやビル、公園、ホテルなどが計画
され、新しい町づくりも進められている。

港魂
⑤ 伝統の 精神生きている 港魂
港魂は、七百年の歴史と伝統を受け継
ぎ発展を支えて来た土崎の人々の心意気
である。勇壮な山車曳きの港祭りにこの
伝統が生き続け、吹雪にきたえし「港魂」
と校歌にも歌われ土崎小学校の教育目標
として、たくましい児童を育てている。

最初の発電所
⑥ エンジンの 明るい光が 土崎に
明治三十四年に将軍野（今の土崎南小
学校の地）に近江谷栄次氏が石炭による
発電所を建設し、秋田県で初めて民家に
電灯をつけた。当時は土崎の町の百軒ぐ
らいに電灯がついたが、後に秋田市の大
工町、通町などにも電気が送られた。

資料3 「上毛かるた」読札一覧

① 白衣観音 慈悲の御手	② 桐生は日本の 機どころ	③ こころの灯台 内村鑑三	④ 草津よいとこ 薬の温泉	⑤ 雷と空風 義理人情	⑥ 歴史に名高い 新田義貞	⑦ ループで名高い 清水トシネル	⑧ 平和の使徒 新島襄	⑨ 伊香保温泉 日本の名湯
⑩ 紅葉に映える 妙義山	⑪ ゆかりは古し 貫前神社	⑫ 繰起たるまの 少林山	⑬ 邪馬深しのぐ 吾妻峡	⑭ 昔を語る 多胡の古碑	⑮ そろいの支度で 八木節直頭	⑯ 和風の大家 関孝和	⑰ 利根は 坂東一の川	⑱ 老農 船津伝次平
⑳ 仙境尾瀬沼 花の原	㉑ 銘仙機出す 伊勢崎市	㉒ 天下の義人 茂左衛門	㉓ 繭と生糸は 日本一	㉔ 碓氷峠の 関所跡	㉕ つる舞う形の 群馬県	㉖ 関東と信越つな 高崎市	㉗ 力あわせる 二百萬	㉘ 花山公園 つつじの名所
㉙ 裾野は長し 赤城山	㉚ 水上、谷川 スキーと登山	㉛ 浅間のいたずら 鬼の押し出し	㉜ 県都御橋 生糸の市	㉝ 望る榛名の キャンプ村	㉞ ねぎとこんにやく 下仁田名産	㉟ 世のちり洗う 四万温泉	㊱ 理想の郷化に 霧源群馬	㊲ 日本で最初の 富岡製糸
	㊳ しのぶ毛の国 二子塚	㊴ 三波石と共に 名高い冬桜	㊵ 分福茶釜の 茂林寺	㊶ 大田金山 子首登竜	㊷ 中山道しのぶ 安中杉並木	㊸ 滝は吹割 片品深谷	㊹ 沼田城下の 塩原太助	㊺ 誇る文豪 田山花袋

いうことである。ここでは、そうした地域素材の教材化の視点から、いかなる題材が選定されているのか、「八橋・寺内かるた」の特色を「土崎かるた」「上毛かるた」との比較から明らかにしていきたい。なお「土崎かるた」を比較対照として選定したのは、「八橋・寺内かるた」が野尻氏を中心とする教員の作成によるものであるのに対して、「土崎かるた」は子ども達による手作りかるたであるからである。「土崎かるた」は、野尻氏が作成した「郷土かるた」の影響を受け、土崎小学校の小野忠校長の提言により作成された。「八橋・寺内かるた」など野尻氏によるかるたは、題材の選定や実際のかるた作成は教員により作成されたが、「土崎かるた」は題材の選定から読札の作成、取札の図案など全てが当時在籍していた児童により作成された。同じ秋田市でも八橋・寺内地区と土崎地区といった対象地域の違いによる題材の相違は当然であるが、かるたの作成主体が相違するこの二つのかるたを比較することで、その特色を明らかにしたい。また「上毛かるた」は1947（昭和22）年に作成されたわが国の代表的「郷土かるた」である。津野匡彦を中心とする群馬県同胞援護会（現群馬文化協会）によって、社会事業活

動の一環として製作され、作成当初から今日まで総計110万部の発行部数を誇っている¹⁶。1948（昭和23）年に始められた「上毛かるた競技大会」は、1997（平成9）年には50回記念大会を実施し、他県での開催数を圧倒している。「上毛かるた」は県単位の郷土かるたであり、「八橋・寺内かるた」や「土崎かるた」とは題材の対象範囲の相違はあるが、全国を代表する郷土かるたであり、その対象題材を類型化することにより比較してみたい。

(2)各かるたの題材の比較による特色

それぞれ三つのかるたに関して、総札数44枚の題材による分類は、資料4の通りである。各かるたの題材として、最も多かった上位3項目を挙げれば、「八橋・寺内かるた」は「史跡」が18点で最も多く、次が「地名」で9点、3番目は「寺社」「神社」「人名」でそれぞれ4点であった。また「土崎かるた」もやはり「史跡」が20点で最も多く、次は「人名」で11点、3番目は「その他」で5点、最後に「上毛かるた」は「地名」が最も多く21点、次が「人名」で8点、3番目は「史跡」で5点であった。3つのかるたの題材として、まず全般的に指摘できるのは、

資料4 各かるたにおける題材の比較

項目		八橋・寺内		土 崎		上 毛	
史跡	城址	う, つ, ろ	3	お	1		
	塚	い, し, て, は	4			し	1
	塔	く, そ, ほ	3				
	堂	な	1				
	像	ら	1	き, く	2	ひ	1
	碑	と, に	2			む	1
	建築物			い, え, こ, に, む, め, よ	7	う	1
	並木	ま	1			な	1
	街並			ひ, ま, み	3		
	交通			ち, ら, ろ	3		
	その他	あ, の, れ	3	ぬ, ね, は, ふ	4		
合計		18		20		5	
寺社		け, さ, せ, ふ	4	れ	1	ふ, お	2
神社		こ, み, む, り	4	う, し	2	ゆ	1
地名	山	ひ, へ, も	3			い, え, も, す	4
	川					と	1
	橋	お, き	2				
	都市					か, め, け, き	4
	名所					は, る, み	3
	名勝					た, せ, や, あ, さ	5
	温泉					い, は, く	3
	地区	か, ち, や	3				
その他	た	1	わ	1	つ	1	
合計		9		1		21	
人名		す, ぬ, め, ゆ	4	さ, す, せ, そ, つ, な, の, へ, や, り, る	11	ろ, ほ, ぬ, れ, へ, わ, こ, て,	8
祭				た, と, も, ゆ	4		
郷土玩具		え, よ	2				
名産		ね	1			ね	1
産業						に, り, ま	3
事件		る	1				
その他		わ	1	あ, か, け, て, ほ,	5	ち, ら, そ	3
合計			44		44		44

・題材の分類は、説札と取札にある解説を参考にし、その主題材を対象に行った。

「史跡」「地名」「人名」が多く取り上げられていることである。以下、このうち「史跡」と「地名」、そして「その他」の3つの項目について取り上げ、詳述したい。

①「史跡」について

まず「史跡」であるが、「史跡」は「八橋・寺内かるた」「土崎かるた」で最も多く取り上げられている題材であり、「八橋・寺内かるた」では18点、「土崎かるた」では20点で、全体の4割以上を占めている。前述したように「八橋・寺内かるた」は元来学校の所在が歴史的史跡に恵まれ、それを活かしたかるた作りをコンセプトにして製作されたので、当然取り上げられている題材は歴史的題材が多くを占めている。しかし、「土崎かるた」は「八橋・寺

内かるた」の影響を受け作成されたとはいえ、その題材選定は土崎小学校児童に任されており、意図的に歴史的題材を取り上げ作成された経緯はない。しかし、実際に選定された題材は「史跡」が20と全体の半数近くを占め、また「人名」もその内容をみればほとんどが歴史的内容と関わりがある。それを考慮して「史跡」「人名」を合わせると31の題材になり、全44札の4分の3を占める。土崎は、室町期に安東氏の居城が築かれた歴史ある場所であり、そうした地域的特色が題材に示されている。

さて、その「史跡」の内容であるが、「八橋・寺内かるた」の場合は全18点のうち「塚」が4点で最も多く、次が「城址」「塔」「その他」で3点ずつである。「塚」の具体的内容は、㉠の一里塚、㉡の蜷塚・鶏卵塚、㉢の筆塚、㉣の花塚で、「城址」は3

点とも出羽柵で知られる秋田城址に関するもの、「塔」は④の佐竹藩期の刑場に関する供養塔、⑤は秋田県唯一の木造三重塔、⑥は宝塔寺五重塔である。前述したように、秋田市八橋・寺内地区は奈良期に出羽柵が築かれた地であり、それに関連する「史跡」が題材としてかるたに多く読み込まれていることがわかる。一方「土崎かるた」においては、「史跡」全20点のうち「建築物」が最も多く、「その他」を除けば、次は3点ずつの「街並」と「交通」である。具体的に、「建築物」は④の佐竹藩期の米倉、⑤の1902（明治35）年に創設された土崎駅、⑥の法興寺三大楼門などである。この「建築物」は、明治期に創設されたものが全7点中5点を占める。「建築物」は、「八橋・寺内かるた」の「史跡」では、一つも取り上げられておらず、秋田の近代化をリードした土崎の歴史的姿を反映するものとして特色がある。

②「地名」について

次に、「地名」について取り上げる。「地名」は「八橋・寺内かるた」で9点で2番目に多く取り上げられている題材であり、「上毛かるた」においては21点で最も多く取り上げられている題材である。逆に、「土崎かるた」においては「その他」の1点のみで、内容は⑥の秋田港を詠ったものだけである。これは、「地名」がむしろ「建築物」や「街並」などに還元され、かるた化されたからであると考えられる。

さて「地名」の内容であるが、「八橋・寺内かるた」では「地名」全9点の内訳は、「山」「地区」が3点ずつ、「橋」が2点、「その他」が1点である。具体的内容は、「山」は④の大野東人に関わる昼寝山、⑤の坂上田村麻呂に関わる幣切山、⑥の廻船航路に関わる象頭山、「地区」は⑥の雅楽伝承が残る神屋敷、⑤の寺内の字である児桜の地名の由来、④の八橋の地名の由来、「橋」は④の佐竹藩期の刑場に関わる面影橋、⑥の芳香で金持ちになった伝承が残る伽羅橋、そして「その他」は④の平安期の秋田大地震に関わる断層である。特に、④の面影橋と、⑥の断層に関しては事項で詳述したい。一方「上毛かるた」においては、「都市」「名所」「名勝」「温泉」「山」が中心的題材であり、現在的、地理的題材が多くを占める。特に「都市」では、④の前橋市や⑥の高崎市など現在の群馬県における中心都市を詠っており、「八橋・寺内かるた」「土崎かるた」などの

市内地区単位のかかるたではない、県単位のかかるたの特色を示している。地名研究は、明治期に吉田東伍、昭和期に柳田国男により開かれ、戦後は谷川健一によって引き継がれた。この成果を受け、1970年代には谷川彰英氏（現筑波大学）により地名教育が提唱されている¹⁷。谷川氏は、「新宿」や「木下」など豊富な実践を展開したが、こうした「郷土かるた」を活用した展開は、地名教育の「遊び」を取り入れた実践としてその多様な展開を加えるものである。

③「その他」について

最後に、「その他」について取り上げたい。「その他」は、項目の枠組みに分類されないものを「その他」としている。しかし、こうした一般的枠組みに分類しきれない項目に、その地域の特色を見出すことができる。ここでは、そうした「その他」の項目における各かるたの特色について取り上げたい。

まず「八橋・寺内かるた」の場合、具体的には④のわが郷土のみである。読札は「わが郷土 栄える 基を 私らで」で、これからの郷土発展に尽くす意気込みを詠っている。基本的に「八橋・寺内かるた」は、学校近隣の史跡を中心に題材として作成されたもので、歴史的観点が中心で作成されている。しかし、その最後の札で未来を築く子どもたちへの願いを詠い込んでいる。こうした観点は、やはり学校近隣を中心とした地域単位でのかるた作成には重要なものであり、「土崎かるた」においてもタイムカプセルを詠った④や未来の秋田港開発事業「ポートルネッサンス21」を詠った③において取り上げられている。

その「土崎かるた」では「その他」は5点で、具体的内容は⑥の明治期の石油ランプへの移行、④のタイムカプセル、⑤の土崎港岸壁釣り、⑦の港魂、ほの「ポートルネッサンス21」である。④のタイムカプセルと③の「ポートルネッサンス21」は、前述の通り未来志向の題材である。しかし、⑦の港魂のようにその地域の精神風土を未来に継承すべき伝統として詠い込んでいるところは、同じ未来志向でも「八橋・寺内かるた」にはみられなかった「土崎かるた」の特色であり、かるたをして同地域の特性を示している。読札は「伝統の 精神生きてる 港魂」であり、元来安東氏の城下町として佐竹氏の城下町としての秋田市とは違う歴史的背景を持つ土崎の精神風土を、子どもたちをして未来に継承すべきもの

として取り上げているのである。同じ特性を持つ札は「上毛かるた」にもあり、㊸の「雷と空風 義理人情」として詠われている。

最後に、「上毛かるた」では㊸の「力あわせる二百万」、㊹の八木節、㊺の「雷と空風 義理人情」の3点である。㊸は前述の通りであるが、ユニークなのは㊸の県人口を詠ったものである。これは、その時々の群馬県の人口を詠ったもので、人口の増減のともない、実数は変更して詠み変えられている。常に固定的かるたではなく、内容の変動をとまなう題材として特色が指摘できる。

(3)題材年表による比較

④「八橋・寺内かるた」について

さて、前述したように「八橋・寺内かるた」「土崎かるた」とともに題材として「史跡」が最も多く取り上げられており、その他「地名」や「人名」に関する項目でも歴史的内容が豊富に取り上げられている。では、実際にいつの時代の題材が取り上げられているのであろうか。「八橋・寺内かるた」と「土崎かるた」を取り上げ検討したい。(資料5参照)

まず「八橋・寺内かるた」について、資料5の通り時代ごとの実数は「奈良」4、「平安」5、「鎌倉」1、「室町」0、「江戸」18、「明治」2、「大正」0、「昭和」2、「平成」0、「不明」13であった。最も多い題材は江戸時代で、次は「不明」を除けば平安時代の5であった。「八橋・寺内かるた」の特色として、奈良・平安時代の題材が多く取り上げられていること、江戸時代の題材が突出して多いことの2点が挙げられる。まず、前者に関して、具体的には「奈良」では㊸で出羽柵の秋田城址、㊸と㊹でこれと関わりが深い古四王神社、㊹では大野東人とかわる昼寝山の地名の由来が取り上げられている。また「平安」では、㊸の幣切山、㊹の八橋の地名の由来、㊹の両津八万は全て坂上田村麻呂に関わる題材、㊸は大地震跡の断層、㊹はやはりその大地震に関わり秋田城址が取り上げられている。前述したように、秋田市八橋、寺内地区は奈良期に出羽柵が築かれた場所であり、東北地方の中でも律令体制に関わる最も古い史跡が残存する場所である。題材として、こうした秋田城址に関わるものは4分の1を占め、「八橋・寺内かるた」の特色である。また㊸と㊹の両札に詠われている大地震は、830(天長7)年の秋田河下流の大地震で、㊸はその地震による断層と

「傘岩」を、㊹は地震の秋田城倒壊による人馬集合の様子を詠ったものである。特に㊸は、歴史的事件を地形と通して取り上げたものとして特色がある。資料4みるように、例えば「上毛かるた」では「地名」として「名所」「名勝」を取り上げ、特色ある地形を題材として取り上げている。しかし「八橋・寺内かるた」の場合、「名所」「名勝」ではなく地域に残る歴史的事件を傷跡に残す地形(断層)を取り上げており、「八橋・寺内かるた」の特色である。

次に江戸期に関して、「八橋・寺内かるた」では全部で18の題材が取り上げられており、題材の時代区分中最も多い。具体的には、㊸の全良寺、㊹の寿量院、㊹の三吉八幡などの「寺社」「神社」関係、㊸の一里塚や㊹の蜷塚・鶏卵塚などの「史跡」、㊸の菅江真澄や㊹の吉川五明など江戸期に活躍した「人名」などである。特色ある題材は、㊸の面影橋や㊹の供養塔で詠われる刑場に関わる題材である。八橋地区には江戸期に佐竹藩の刑場が置かれ、供養塔はその処刑者を慰めるものであった。また面影橋は、処刑場に向かう最後の橋で、受刑者は川面に自身の最後の姿を映したとして今日でもその橋名が残されている。前述したように、「八橋・寺内かるた」完成後、八橋小学校ではこの札を題材に劇化し、文化祭で発表している。

以上、「八橋・寺内かるた」に関する題材の時系列的視点からの分析として、豊富に取り上げられている奈良・平安期、そして江戸期における題材の特色について検討した。以上は、多く取り上げられている題材であるが、逆に鎌倉・室町期の題材は一つも取り上げられていない。系統的、通史的な時代学習を前提として、このかるたの題材選定が行われたわけではないので、当然取り上げられる題材の時代には偏りが生じる。この時代的偏りが、むしろ「八橋・寺内かるた」の教材としての特色である。

⑤「土崎かるた」について

一方の「土崎かるた」については、逆に室町期に4つの題材が取り上げられていること、また明治期の題材が突出して多く、さらに明治・大正・昭和・平成の札を加えると近現代に関わる題材が全題材の半数を超え充実していることの2点が挙げられる。

まず、室町期に4つの題材が取り上げられていることに関して、具体的内容は全て土崎に居城をもった安東氏に関連する題材である。土崎は、津軽より

資料5 「八橋・寺内かるた」と「土崎かるた」の題材年表

世紀	時代区分	八橋・寺内		土 崎	
1~7					
8	奈 良	う, こ, ひ, れ	4		
9	平 安	た, へ, や, り, ろ	5		
10					
11					
12	鎌 倉				
13					
14	室 町			お, つ, ま, み	4
15					
16	江 戸	い, え, お, く, さ, し, す, せ, そ, と, な, ね, ま, み, む, め, ゆ, ら	18	い, う, は, よ	4
17					
18					
19	明 治	ぬ, る	2	あ, え, せ, そ, こ, な, に, ふ, へ, む, め, や, け, ら, ろ	15
20	大 正			さ, ち, ね	3
21	昭 和	つ, の	2	す, か, く, ぬ, の, わ	6
22	平 成			ほ	1
	不 明	あ, か, き, け, ち, て, に, は, ふ, ほ, も, よ, わ	13	し, た, て, と, き, け, ひ, も, り, る, れ	11
	合 計		44		44

・題材の時代分類に関しては、主に誂札と取札の解説を参考にし、特に取札の解説により年代や時代が読み取れる範囲で分類をした。

来た安東鹿季が室町期に湊城を築き、以来二百年余りにわたり同地を支配した地である。㊤で「湊八丁」と詠われる城下町や㊦で詠われる廻船問屋は、江戸期にも土崎湊として賑わい、秋田への佐竹氏入府以前から繁栄をみせ、今日でも土崎に住む人々の誇りとなっている。前述したように、この「土崎かるた」は、その題材の選定から実際のかるたの作成まで、土崎小学校に所属する子どもたちにより作成されたものであるが、「八橋・寺内かるた」には一つも見受けられない室町期の題材が「土崎かるた」に4つも取り上げられているのは、こうした秋田市における土崎独特の歴史的背景が、児童をして今日に生きているからである。

次に明治期の題材が豊富である点を取り上げる。明治期の題材は15で、具体的内容としては㊧の秋田県最初の発電所、㊨の国鉄土崎工場、㊩の日本石油秋田製油所などの「建築物」、㊪のテト馬車や㊫の野口汽船会社などの「交通」、㊬の校歌の作者金子洋文や㊭の外交官であった須磨弥吉郎などの「人名」である。特に、「建築物」は「土崎かるた」の「建築物」全7点中5点、「人物」は全11点中5点を占め、明治期の題材選出を豊富にしている。

さらに続く大正・昭和・平成の各期の題材に関しても、「土崎かるた」では豊富に取り上げられている。「八橋・寺内かるた」では大正期に2点、明治期を合わせても近現代全体で4点のみであった。これに対して、「土崎かるた」では、大正期が3点、昭和期が6点、平成期が1点、明治期を合わせると25点にもものなり全44点の半数を超える。具体的題材は、大正期では㊮のちんちん電車や㊯の日本で最初のプロレタリア雑誌『種まく人』、昭和期は㊰の土崎空襲に関わる乙女像、㊱の力士である出羽湊、平成期では㊲の秋田港開発事業の「ポートルネッサンス21」である。

以上、「土崎かるた」については、室町期に安東氏に関わる4つの題材が取り上げられていること、さらに明治期の題材など近現代に関わり題材が多く、充実していることの2点を特色として挙げた。繰り返し述べるように、「土崎かるた」は教員ではなく、土崎小学校の在校生によって作成された。結果的に、室町期や近現代期の題材が多く取り上げられていることは、同校児童をしてその期の史実を「郷土かるた」として読み込みたいとのことである。歴史教育において、歴史的見方考え方の育成を目指す時、必

ずしも史実を網羅的、通史的に扱う必要はない。「郷土かるた」は、その際取り上げるべき題材のメルクマークになり得るものであり、とりわけ地域の題材を取り上げる際の教材化の観点として具体的示唆を与えるものである。

4. 「八橋・寺内かるた」の今日における活用

「八橋・寺内かるた」は、その後八橋小学校が開校20周年を迎えた1993（平成5）年に、記念事業の一つとして再版された。野尻氏の協力を得て再編され、1992（平成4）年度の卒業生と1993（平成5）年度の卒業生全員に贈られた。このかるたは、今日でも八橋小学校で様々な形で活用されている¹⁸。例えば、各教科における活用では6年生の社会科歴史学習での「史跡巡り」と関連した活用¹⁹、生活科では共通体験をする「なぞさぐりツアー」や「みんなで作ろう八橋人形」での活用、また「総合的な学習の時間」では例えば3年生の「お宝発見！ぼくのおたしのお気に入り～自分たちの住む八橋をたんけんして～」において活用されている²⁰。さらに、特別活動では1年生から6年生までを縦割りに「ふれあいグループ」に編成し、八橋小祭り、八橋ゲームズ、などの各活動においてや、仲よし委員会によるウォークラリー、6年生を送る会、冬のかるた大会などで活用されている。

近年、国語科や社会科の教材としてマンガが注目され多様が実践例が報告されている²¹。かるたは、マンガと違いストーリー性には欠けるが、その主要な構成要素はやはり題材を図案化した取札とそれに関する文字情報で成り立っている。この図と文書が一体化された教材として、その多様な実践が期待される。例えば、秋田県増田町出身で「釣りキチ三平」で知られる矢口高雄は、文字からなる小説と絵と文字からなるマンガを比較して、その特性を以下の様に述べている²²。文字からなる小説は心理描写に長け、一方の絵は情景描写に長けている。例えば、清流を渾身いっぱい力で昇ろうとする鮎の様子や数十人の集団の様子を文章で表そうとしたら何万語を使っても不可能である。ところが、絵だとたった一枚で可能である。矢口氏によれば、心理描写に優れている文字と情景描写に優れている絵が組み合わさって作られるマンガの方が機能が優れているということになる。これは、マンガと小説を比較したものであるが、ストーリー性を除けばかるたも同様である。

むしろ、かるたにはストーリー性を付加する必要がないからこそ、児童をして容易に作成できる特性がある。題材を図案化し、それを解説する内容を付加すればいいのである。今年度から小中学校で全面的実施となった平成10年度版学習指導要領の特色のひとつとして、「学び方、調べ方」学習の重視が挙げられているが、小学校では、さらに「調べたことを表現する」といった表現活動も重視されている。児童による調べ学習をどうまとめ表現するか、その多様な展開が期待されているが、地域素材のかるた化は旧くて新しい、「不易」な手立ての一つである。

5. 地域文化としての教材

以上、本研究では秋田市立八橋小学校で作成された「八橋・寺内かるた」を事例として、主に歴史的地域素材の教材化について、作成過程を明らかにするとともに、同じ秋田市の「郷土かるた」である「土崎郷土かるた」、全国的に著名な「上毛かるた」との比較によりその題材における特色を明らかにしてきた。先述したように、かるたは読札・取札で構成されるが、その数が限定されているので、当然その題材となる地域素材も限定される。かるたの題材として選択された地域素材は、そうした厳選された結果としての地域素材といえる。本研究では、各かるたにどのような地域素材が選択されたのか、そこにはどのような特色があるのか、そしてそれはどのような過程で作成されたのかに注目し分析を試みた。

本研究では、こうした「郷土かるた」のいわば内容に注目し分析を試みたが、作成されたかるた自体にも地域文化としての意義を認めたい。それは、伝統玩具としてのかるたとしての意義としてよりも、むしろ学校教育の中で教員や子ども達によって作成された教材そのものの地域文化としての意義である。「八橋・寺内かるた」や「土崎かるた」は、いわば学校が生み出した文化である。こうした教材は、その作成者のみならず、作成の舞台となった学校において継承・発展されることによって、地域文化としての意義を有する。こうした教材を、教員個別のものとするのではなく、学校を拠点として継承・発展することで、学校を中心とした地域文化のデータベース化も試みることができる。学校を拠点とした教材の継承・発展は、これまで個別に開発・「消費」される教材を、他の教員、当該学校として共有化することであり、ひいてはその地域の文化として継承

することである。「八橋・寺内かるた」や「土崎かるた」を事例とした教材の継承と発展は、単に先人の教材作成の労苦をそのまま継承することではなく、学校を拠点とした文化の継承・発展として意義あるものである。

参考文献

- 1 「郷土かるた」に関しては、山口幸男（群馬大学）・原口美貴子（同）による『郷土かるたと郷土唱歌』（近代文藝社、1995）など一連の代表的先行研究がなされている。
- 2 野尻滋氏の略歴は、以下の通りである。

1925（大正14）年	秋田市生
1964（昭和39）年	秋田市立豊岩中学校教諭
1967（昭和42）年	秋田市立城南中学校教諭
1968（昭和43）年	秋田市教育委員会派遣により秋田県教育庁中央教育事務所指導主事
1971（昭和46）年	秋田市教育委員会指導主事，学校教育課参事
1974（昭和49）年	秋田市立下北手小学校校長
1976（昭和51）年	秋田市立旭川小学校校長
1978（昭和53）年	秋田市立八橋小学校校長
1982（昭和57）年	秋田市立築山小学校長
1984（昭和59）年	退職
現在	秋田市榎山本町在住。秋田蘭州会会長，秋田県卓球協会相談役，秋田市卓球連盟名誉会長，77歳。
- 3 「古里 わたしたちの築地・榎山」（1982），「ふるさと わたしたちの旭北地区」（1988），「ふるさと 私たちの保土野」（1988），「『いろは』でつづる秋田市政百年」（1989），「ふるさと 私たちの川尻・旭南」（1990）の5つである。
- 4 秋田県広報協会編『あきた』'90 9月号，（秋田県広報協会，1990），30頁。
- 5 2002年8月1日の野尻氏への聞き取りによる。なお，野尻氏への聞き取りは，その後同年10月16日，12月19日に実施している。
- 6 拙稿「小田内通敏の郷土教育論の実践的展開—山梨県師範学校における『郷土科』カリキュラムを事例として—」日本社会科教育学会『社会科教育研究』第78号，（日本社会科教育学会，1997），14-27頁。
- 7 『秋田魁新報』（1979年，月日不明），「でっかいプレゼントだ！八橋小に石油ヤグラの模型」参照。
- 8 2002年8月1日，現在秋田市立寺内小学校に勤務されている中村（当時小松）恵子氏への聞き取りによる。
- 9 『秋田魁新報』（1980年1月28日），6頁，「八橋小で郷土カルタ作り」参照。
- 10 前掲書1，45-46頁参照。
- 11 前掲註5の野尻氏への聞き取りによる。
- 12 秋田県下の代表的地元紙である『秋田魁新報』に，1959（昭和34）年から25回に及ぶ連載がなされた。
- 13 前掲註5の野尻氏への聞き取りによる。
- 14 前掲註9参照。
- 15 前掲註5の野尻氏への聞き取りによる。
- 16 山口幸男・原口美貴子「第7講 地域から郷土へ—郷土かるた，郷土唱歌の教材開発—」次山信夫編『子どもの側に立つ社会科授業の創造—新しい社会科教育像を求める実践的構想15講—』（東洋館，1998），97-98頁参照。
- 17 谷川彰英『地名に学ぶ』（黎明書房，1984），同『地名の魅力』（白水社，2002）参照。
- 18 2002年7月17日の八橋小学校における聞き取りによる。
- 19 秋田市立八橋小学校編『平成14年度 史跡めぐり』（秋田市立八橋小学校，2002）参照。
- 20 秋田市立八橋小学校編『平成13年度研究紀要 八橋のあゆみ』（秋田市立八橋小学校，2002）参照。
- 21 授業づくり演習報告書編集委員会編『1998（平成10）年度「授業づくり演習」実践報告書 マンガによる授業づくりⅢ』（筑波大学教育学系，1999年）など参照。
- 22 山口満，谷川彰英編著『21世紀の教育学シリーズ② 趣味を生かした総合的学習』（協同出版，1999），102頁参照。

Summary

The purpose of the present paper is to record the history of *Furusato Karuta* (or a traditional Japanese style card game) that was developed on the basis of the materials taken from the history and culture of one local area, Yabase, in Akita

prefecture. The game was developed by Mr. Nojiri, a former principal of Yabase elementary school, during the period of 1979 to 1980. Mr. Nojiri has since developed another five sets of card games for his pupils. This type of card games comprises an important aspect of cultural heritage, thus, assuming an important role of handing it down from generation to generation at school as well as in the area where the school is located. The present paper is an attempt to record a process of developing these works, thereby highlighting their unique features in comparison with other similar types of card games, *Tsuchizaki karuta* and *Jomo karuta*, each of which had been developed independently in different areas.

Key Words : “Hurusatokaruta Watashitachi no Yabase Terauchi”, “Home Country Carta”, Regional Materials, Incorporating into the Teaching Materials

(Received January 21, 2003)